

【 復活トロパリ 第8調 】

めぐみふかきしゅよ、なんぢはたかきより  
 恵 深 主 爾 高

くだり、みっかのほうむりをうけて、  
 降 三日 葬 受

われらをくるしみよりときたまえり、  
 我等 苦 釋 給

わがいのちとふくかつなるしゅよ、こう  
 我 生命 復活 主 光

えいはなんぢにきす。  
 榮 爾 歸 ず。

【 生神女進堂祭のトロパリ 第4調 】

こんにちかみのめぐみはしめされ、ひ  
 今日 神 恩 恵 示 人

とびとのすくいはずたえらる。どうてい  
 人 救 傳 童 貞

ぢよはあきらかにかみのでんにあらわれ、  
 女 明 神 殿 現

あらかじめハリストスをしゅうじんにしらしむ。  
 預 衆 人 知

われらもこえをあげてかれによばん。ぞう  
 我等 聲 揚 彼 呼 造

ぶつしゆのおもんばかりとじょうじゆなるものよ、  
 物主思慮成就者  
 よろこべよ。  
 慶

【日本の亜使徒ニコライのトロパリ 第4調】

しととひとしくどうざなるもの、ちゆう  
 使徒等同座者忠  
 じつにしてしんちなるハリストスのえきしゃ、せい  
 實神智役者聖  
 なるしんにえらばれたるふえ、ハリストスのあい  
 神撰笛愛  
 にみちたるうつわ、わがくにのこう  
 満器我國光  
 しょおしゃ、あしとしゆきょうせいニコライ  
 照者亜使徒主教聖  
 よ、なんぢのぼくぐんのため、および  
 爾羊群爲及  
 ぜんせかいのため、いのちをたもうせい  
 全世界爲生命賜聖  
 さんしゃにいのりたまえ。  
 三者祈給

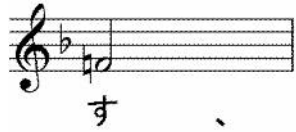
【日本の亜使徒ニコライのコンダク 第4調】

せいせいしゃあしとせいニコライよ、わが  
 成聖者亞使徒聖  
 くになんぢをたびびとおよびいほうじんとうけ  
 國爾旅人及異邦人受  
 しに、なんぢははじめわがくににおいておの  
 爾初我國於己  
 れをがいらいしゃとしりたれども、ハリストスの  
 外來者知  
 ひかりとあたたかきをながし、なんぢのて  
 光暖流爾敵  
 きをぞくしんのことなあし、かれらにか神  
 屬神子爲彼等神  
 みのおんちようをあたえ、ハリストスのきょうかいをたて  
 恩寵與教會建  
 たり、いまこのきょうかいのためにより  
 今此教會爲祈  
 たまあえ、けだしわれらそのしよしはなん  
 給あえ、蓋我等其諸子爾  
 ぢによぶ、わがよきぼくしゃよ、よろこ  
 呼我善牧者慶  
 べよ。

【 生神女進堂祭のコンダク 第4調 】



こうえいはちちとこおとせいしんにき  
光 榮 父 子 お と 聖 神 歸



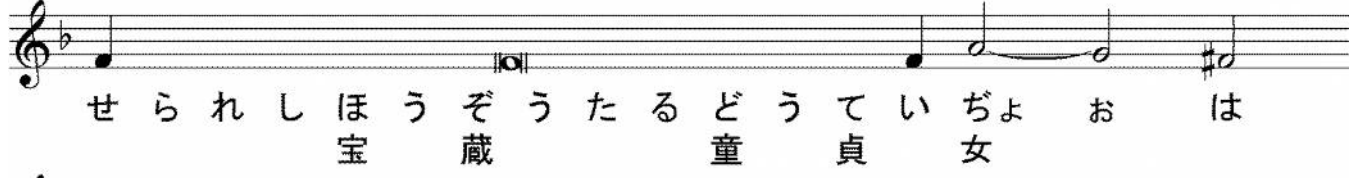
す、



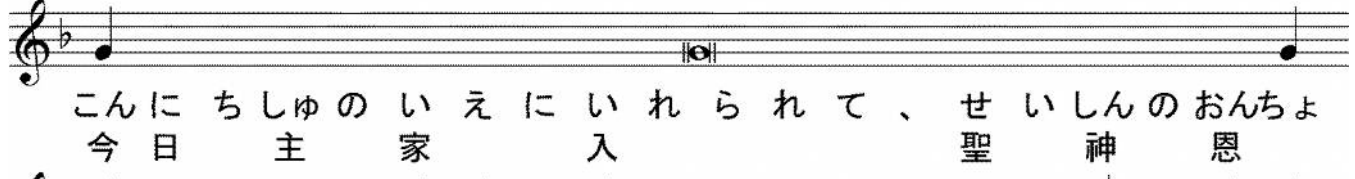
きゆうせいしゆのいときよおきでん、いたりて  
救 世 主 最 淨 殿 至



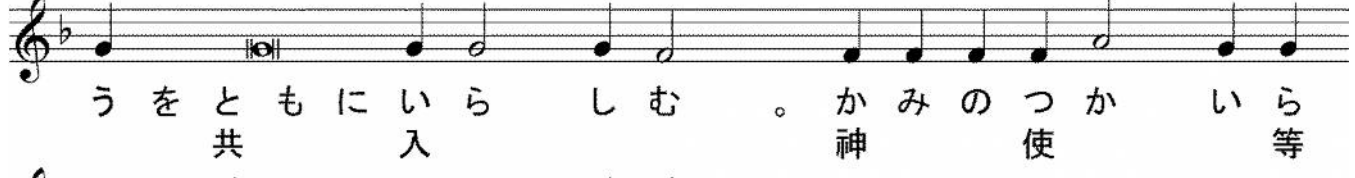
とおときみや、かみのこうえいのせい  
貴 宮 神 光 榮 聖



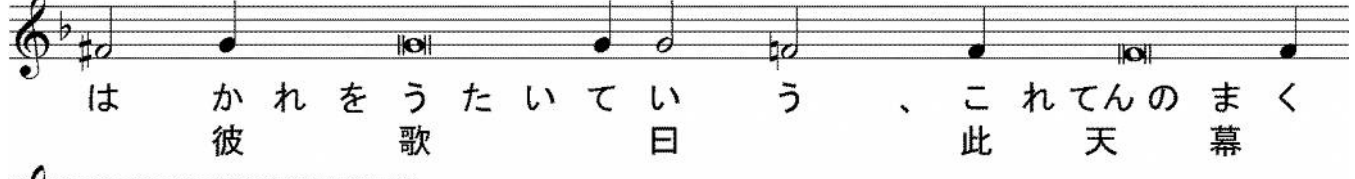
せられしほうぞうたるどうていぢよおは  
宝 蔵 童 貞 女



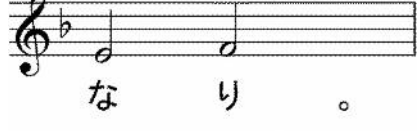
こんにちしゆのいえにいれられて、せいしんのおんちよ  
今日 主 家 入 聖 神 恩



うをとものにいらしむ。かみのつかいら  
共 入 神 使 等



はかれをうたいていう、これてんのまく  
彼 歌 日 う、此 天 幕



なり。

【 復活のコンダク 第8調 】



いまもいつもよよに、アミン。  
今 何 時 世 世

だ い じ ん じ な る し ゅ よ 、 な ん ぢ は は か よ り ふ く  
大 仁 慈 主 爾 墓 復

か つ し て 、 し せ し も の を お こ し し 、 ア  
活 死 者 興

ダ ム を ふ く か つ せ し め た ま え り 。 エ ヴ ア は な ん  
復 活 給 え り 爾

ぢ の ふ く か つ を た の し み 、 せ か い の は て  
復 活 樂 世 界 極

は な ぢ が し よ り お き た る を い わ う 。  
爾 死 興 祝

司祭) ( 黙誦: <sup>せい</sup>聖なる神、<sup>かみ</sup>聖者の中に<sup>せいじゃ</sup>息い、<sup>うち</sup>セラフィムより<sup>いこ</sup>聖三の<sup>せいさん</sup>聲を以て<sup>こえ</sup>歌<sup>もつ</sup>頌<sup>かしよう</sup>せられ、

ヘルヴィムより<sup>さんえい</sup>讚<sup>ことごと</sup>榮<sup>てんぐん</sup>せられ、<sup>ふくはい</sup>悉<sup>ばんぶつ</sup>くの天<sup>む</sup>軍<sup>ゆう</sup>より伏<sup>ゆ</sup>拝<sup>と</sup>せられ、<sup>ひと</sup>萬<sup>なんぢ</sup>物<sup>ぞう</sup>を無<sup>しょう</sup>より有<sup>よ</sup>と

なし、<sup>ひと</sup>人<sup>なんぢ</sup>を爾<sup>ぞう</sup>の像<sup>しょう</sup>と<sup>よ</sup>肖<sup>つく</sup>とに依<sup>なんぢ</sup>りて造<sup>もろもろ</sup>り、爾<sup>たまもの</sup>が諸<sup>もつ</sup>の賜<sup>これ</sup>を以<sup>かざ</sup>て之<sup>を</sup>を飾<sup>り</sup>、

願<sup>ねが</sup>う者<sup>もの</sup>に智<sup>ちえ</sup>慧<sup>めいご</sup>と明<sup>あた</sup>悟<sup>つみ</sup>とを興<sup>おこな</sup>え、罪<sup>もの</sup>を行<sup>す</sup>う者<sup>そのすくい</sup>を棄<sup>ため</sup>てずして、其<sup>つかい</sup>救<sup>を</sup>の爲<sup>に</sup>に痛<sup>いた</sup>悔<sup>ま</sup>

を立<sup>た</sup>て、我<sup>われらいや</sup>等<sup>ら</sup>卑<sup>ふとう</sup>しくして不<sup>なんぢ</sup>當<sup>しょうぼく</sup>なる爾<sup>こ</sup>の諸<sup>とき</sup>僕<sup>おい</sup>を、此<sup>なんぢ</sup>の時<sup>せい</sup>に於<sup>に</sup>ても、爾<sup>が</sup>が聖<sup>な</sup>

る祭<sup>さいだん</sup>壇<sup>こうえい</sup>の光<sup>まえ</sup>榮<sup>た</sup>の前<sup>なんぢ</sup>に立<sup>とうぜん</sup>ちて、爾<sup>ふくはいさんえい</sup>に當<sup>たてまつ</sup>然<sup>る</sup>の伏<sup>た</sup>拝<sup>もの</sup>讚<sup>を</sup>榮<sup>を</sup>を奉<sup>る</sup>るに堪<sup>う</sup>る者<sup>と</sup>

なしし主<sup>しゅさい</sup>宰<sup>なんぢ</sup>よ、爾<sup>なんぢ</sup>親<sup>われら</sup>ら我<sup>ざい</sup>等<sup>いん</sup>罪<sup>くち</sup>人<sup>せいさん</sup>の口<sup>うた</sup>よりも聖<sup>う</sup>三<sup>なんぢ</sup>の歌<sup>じんじ</sup>を受け、爾<sup>の</sup>の仁<sup>に</sup>慈<sup>じ</sup>

以<sup>もつ</sup>て我<sup>われら</sup>等<sup>のぞ</sup>に臨<sup>われら</sup>み、我<sup>およ</sup>等<sup>じゆう</sup>に凡<sup>じゆう</sup>そ自<sup>つみ</sup>由<sup>ゆる</sup>と自<sup>わ</sup>由<sup>たましい</sup>ならざる罪<sup>からだ</sup>を赦<sup>を</sup>し、我<sup>が</sup>が靈<sup>と</sup>と體<sup>と</sup>

を聖<sup>せい</sup>にし、我<sup>われら</sup>等<sup>しょうがいぜんこう</sup>に生<sup>もつ</sup>涯<sup>なんぢ</sup>善<sup>つと</sup>功<sup>え</sup>を以<sup>たま</sup>て爾<sup>せい</sup>に務<sup>む</sup>むるを得<sup>せ</sup>しめ給<sup>え</sup>え、聖<sup>なる</sup>

生<sup>しょうしんぢよ</sup>神<sup>こせい</sup>女<sup>なんぢ</sup>と古<sup>よろこび</sup>世<sup>な</sup>より爾<sup>しよせいじん</sup>の喜<sup>きとう</sup>を爲<sup>よ</sup>しし諸<sup>と</sup>聖<sup>よ</sup>人<sup>に</sup>との祈<sup>に</sup>禱<sup>に</sup>に依<sup>り</sup>りてなり、 )

司祭) 蓋<sup>けだしわ</sup>我<sup>かみ</sup>が神<sup>なんぢ</sup>よ、爾<sup>せい</sup>は聖<sup>われら</sup>なり、我<sup>こうえい</sup>等<sup>なんぢ</sup>光<sup>ちち</sup>榮<sup>こ</sup>を爾<sup>せいしん</sup>父<sup>けん</sup>と子<sup>い</sup>と聖<sup>いつ</sup>神<sup>よ</sup>に献<sup>ず</sup>ず、今<sup>も</sup>も何<sup>時</sup>も世<sup>に</sup>



【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 毅 、 せ い な る  
聖 神 聖 勇 毅 聖

じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め  
常 生 者 我 等 憐

よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 毅 、 せ い  
聖 神 聖 勇 毅 聖

な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ  
常 生 者 我 等 憐

め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 毅 、  
聖 神 聖 勇 毅

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ  
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん  
光 榮 父 子 聖 神

に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。  
歸 今 何 時 世 世

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ  
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う  
聖 神 聖 勇

き、せいなるじょうせいのものよ、われらを  
 殺 聖 常 生 者 我 等 を  
 あわれめよ。  
 憐

司祭) ( 黙誦: <sup>しゅ な よ</sup>主の名に依りて來たる者は<sup>き もの あが ほ</sup>崇め讃めらる、<sup>ざ もの なんぢ そのくに</sup>ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國  
 の<sup>こうえい ほうざ あ つね あが ほ</sup>光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、<sup>いま いつ も よよ</sup>今も何時も世に、 )

【 <sup>プロキメン</sup>提綱 主日第8調 及び 生神女の第3調 】

司祭) <sup>つつし き</sup>慎みて聴くべし、<sup>しゅうじん へいあん</sup>衆人に平安、

誦經) <sup>なんぢ しん</sup>爾の神にも、

司祭) <sup>えいち</sup>睿智、

誦經) <sup>しゅなんぢら かみ ちかい な つくの</sup>プロキメン、主爾等の神に誓を作して償えよ、

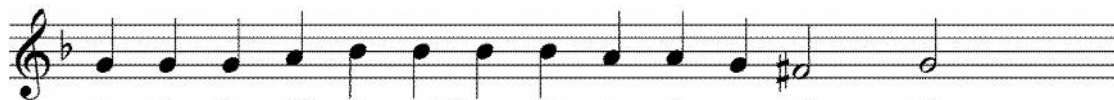
しゅ なんぢらのかみにちかいをなしてつくの  
 主 爾等 神 誓 作 償  
 えよ、

誦經) <sup>かみ し そのな おおい</sup>神はイウデヤに知られ、其名はイズライリに大なり、

しゅ なんぢらのかみにちかいをなしてつくの  
 主 爾等 神 誓 作 償  
 えよ、

誦經) <sup>わ たましい しゅ あが わ しん かみわ きゅうしゅ よろこ</sup>我が靈は主を崇め、我が神は神我が救主を悦べり。

わがたましいはしゅをあがめ、わがしんは  
 我 靈 主 崇 我 神



か み わ が き ゆ う し ゆ を よ ろ こ べ り 。  
神 我 救 主 悦

【 アポストロス 使徒經 224 端 エフェス書 4 章 1 節～6 節 】

司祭) 睿智、

誦經) 聖使徒パヴェルがエフェス人に達する書の讀、

司祭) 謹みて聽くべし、

誦經) 兄弟よ、我、主の爲に囚たる者は、爾等に求む、爾等が召されたる召に稱い

て行え、凡の謙遜と溫柔と恒忍とを以て、愛に因りて互に恕せよ、務めて和平

の繫を以て、神の一なるを守れ。體は一、神は一、爾等が召されたる召の望の一

なるが如し、主は一、信は一、洗禮は一、神萬衆の父は一なり、彼は萬有の上に

在り、萬有を貫き、我等萬人の中に在り。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) 兄弟たちよ。主にある囚人であるわたしは、あなたがたに勧める。あなたがたが召されたその召しにふさわしく歩き、できる限り謙虚で、かつ柔和であり、寛容を示し、愛をもって互に忍びあい、平和のきずなで結ばれて、聖霊による一致を守り続けるように努めなさい。からだは一つ、御霊も一つである。あなたがたが召されたのは、一つの望みを目ざして召されたのと同様である。主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つ。すべてのものの上にあり、すべてのものを貫き、すべてのものの内にいます、すべてのものの父なる神は一つである。

\*\*\*\*\*

【 アポストロス 使徒經 320 端 エウレイ書 9 章 1 節～7 節 】

誦經) 兄弟よ、第一の約には奉事の例と地に屬する聖所とありき。蓋第一の幕は設け

られて、其内に燈臺と、案と、供前の餅とありき、是を聖所と稱す。第二の帷の

後に至聖所と稱する幕ありき。茲には金の香爐と、偏く金を蔽いたる約匱とあり、

其内にマンナを藏めたる金の壺、アアロンの萌せる杖、及び約の碑あり、其上に贖罪

所を覆える光榮のヘルヴィムありき。此等の事は今詳に言うを庸いず。此等の物斯

く備わりて、第一の幕には司祭等恒に入りて、奉事を行い、第二の幕には獨司祭長



いちねん ひとたび ち たづさ い これ おのれ ためおよ たみ あやまち ため けん  
のみ、一年に一次、血を携えざるなくして入り、之を己の爲及び民の愆の爲に獻  
ず。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) 兄弟たちよ。初めの契約にも、礼拝についてのさまざまな規定と、地上の聖所とがあった。すなわち、まず幕屋が設けられ、その前の場所には燭台と机と供えのパンとが置かれていた。これが、聖所と呼ばれた。また第二の幕の後に、別の場所があり、それは至聖所と呼ばれた。そこには金の香壇と全面金でおおわれた契約の箱とが置かれ、その中にはマナのはいつている金のつぼと、芽を出したアロンのつえと、契約の石板とが入れてあり、箱の上には栄光に輝くケルビムがあつて、贖罪所をおおっていた。これらのことについては、今ここで、いちいち述べるできない。これらのものが、以上のように整えられた上で、祭司たちは常に幕屋の前の場所にはいつて礼拝をするのであるが、幕屋の奥には大祭司が年に一度だけはいるのであり、しかも自分自身と民とのあやまちのためにささげる血をたずさえないで行くことはない。

\*\*\*\*\*

【 アリルイヤ 主日第8調 及び 生神女の第8調 】

司祭) <sup>なんぢ へいあん</sup> 爾に平安、

誦經) <sup>なんぢ しん</sup> 爾の神にも、

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) アリルイヤ、

誦經) <sup>きた しゅ うた かみわ すくい かため よ</sup> 來りて主に歌い、神我が救の防固に呼ばん、

誦經) 女よ、之を聴き、之を觀、爾の耳を傾けよ、



司祭) ( 黙誦: 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の 淨き光を輝かし、我が思念

め目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる 誠を

おそる 畏をも入れて、我等が 悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、

爾は我が 靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし

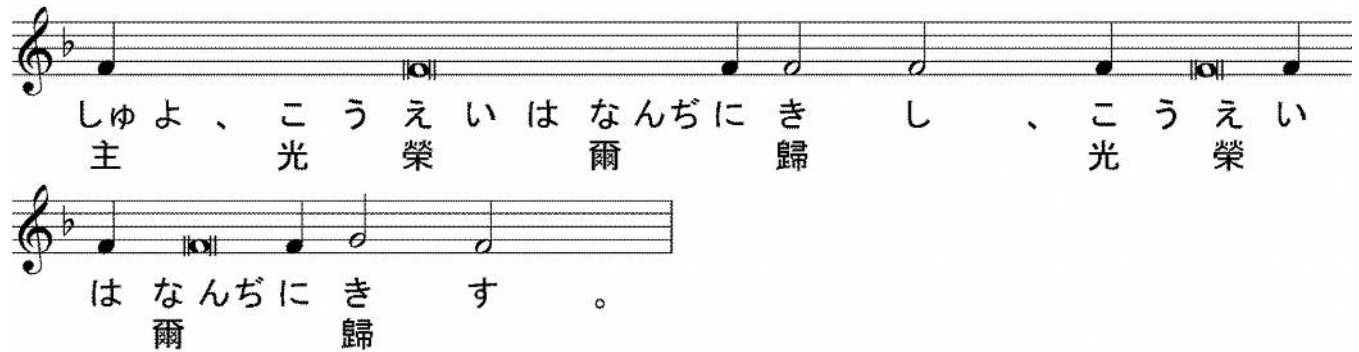
て生命を施す 爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世々に、アミン。 )

【 エヴァンゲリオン 福音經 ルカ福音書66端 12章16~21節 】

司祭) 睿智、 肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) ルカ傳の聖福音經の讀、



司祭) 謹みて聴くべし、主は左の譬を設けて曰えり、或富める人に田畝の善く實れるあり、

彼自ら村りて曰えり、我何を爲さんか、蓋我が作物を藏むべき處なし。又曰えり、

我斯く爲さん、我が倉を毀ちて、更に大なる者を建て、此の中に我が 悉くの穀物と

たから あつ わ たましい い たましい なんぢ たねん ため たくわ おお たから  
 貨物とを聚めて、我が 靈 に謂わん、 靈 よ、 爾 には多年の爲に 蓄 えたる多くの貨物  
 あり、 息み、 食い、 飲み、 樂 めと。 然れども神は彼に謂えり、 無知なる者よ、 今夜 爾 の  
 たましい なんぢ もと しか なんぢ そな ところ もの だれ き およ おのれ ため  
 靈 を 爾 より索めん、 然らば 爾 が備えし 所 の者は誰に歸せんか。 凡そ 己 の爲に  
 たから つ かみ おい と もの か ごと  
 財 を積み、 神に於て富まざる者は是くの如し。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) イエスは一つの譬を語られた、「ある金持の畑が豊作であった。そこで彼は心の中で、『どうしようか、わたしの作物をしまっておく所がないのだが』と思ひめぐらして言った、『こうしよう。わたしの倉を取りこわし、もっと大きいのを建てて、そこに穀物や食糧を全部しまい込もう。そして自分の魂に言おう。たましいよ、おまえには長年分の食糧がたくさんたくわえてある。さあ安心せよ、食え、飲め、楽しめ』。すると神が彼に言われた、『愚かな者よ、あなたの魂は今夜のうちにも取り去られるであろう。そしたら、あなたが用意した物は、だれのものになるのか』。自分のために宝を積んで神に対して富まない者は、これと同じである」。

\*\*\*\*\*

司祭) 彼の時、 彼等が行ける時、 イスス 一 の村に入りしに、 或 婦 マルファと名づくる者、  
 かれ そのいえ むか そのしまい な もの そくか ぎ そのことば  
 彼を其家に迎えたり。其姉妹にマリヤと名づくる者あり、イススの足下に坐して、其言  
 き きょうじ おお よ ところ わづら つ い しゅ わ しまい  
 を聴けり。マルファは 供事 の多きに困りて 心 を 煩 わし、 就きて曰えり、 主よ、我が姉妹、  
 われひとり のこ きょうじ なんぢい な これ めい われ たす  
 我一人を遺して 供事せしむるを 爾 意と爲さざるか、 之に命じて、我を助けしめよ。イ  
 くれ こた い なんぢ おお こと おもんばか ところ ろう  
 ス 彼に答えて曰えり、マルファよ、マルファよ、 爾 は多くの事を 慮 りて 心 を 勞せ  
 しか もと ところ ひとつ よ ぶん えら これ かれ うば べ  
 り、 然れども 需むる 所 は 一 のみ。マリヤは善き分を擇びたり、 是は彼より奪う可から  
 これ い とき ひとり おんたみ うち こえ あ くれ い なんぢ はら はら なんぢ  
 ず。此を言う時、 一 の 婦 民の中より聲を揚げて、彼に謂えり、 爾 を 孕みし腹と 爾  
 す ち さいわい くれ い しか かみ ことば き これ まも もの さいわい  
 が哺いし乳とは 福 なり。彼は曰えり、 然り、神の言 を聴きて之を守る者は 福 なり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) イエスがある村へはいられた。するとマルタという名の女がイエスを家に迎え入れた。この女にマリヤという妹がいたが、主の足もとにすわって、御言に聞き入っていた。ところが、マルタは接待のことで忙がしくて心を取りみだし、イエスのところにきて言った、「主よ、妹がわたしだけに接待をさせているのを、なんともお思いになりませんか。わたしの手伝いをするように妹におっしゃってください」。主は答えて言われた、「マルタよ、マルタよ、あなたは多くのことに心を配って思いわずらっている。しかし、無くてならぬものは多くはない。いや、一つだけである。マリヤはその良い方を選んだのだ。そしてそれは、彼女から取り去ってはならないものである」。イエスがこう話しておられるとき、群衆の中からひとりの女が声を張りあげて言った、「あなたを宿した胎、あなたが吸わ

れた乳房は、なんとめぐまれていることでしょう」。しかしイエスは言われた、「いや、めぐまれているのは、むしろ、神の言を聞いてそれを守る人たちである」。

\*\*\*\*\*



しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい  
主 光 榮 爾 歸 し 光 榮

はなんぢにきす。  
爾 歸

※聖体礼儀③（金ロイオアン聖体礼儀）へ